

やすらぎ



「歎異抄」(第四十三回)

標 暁 講述

「歎異抄」第十七章

一 辺地の往生をとぐるひと、ついには地獄におつべしということ。この条、いずれの証文にみえそうろうぞや。学生だつるひとのなかに、いいいださるることにてそうろうなるこそ、あさましくそうらえ。経論聖教をば、いかようにみなされてそうろうやらん。信心かけたる行者は、本願をうたがうによりて、辺地に生じて、うたがいのつみをつぐいてのち、報土のさとりをひらくこそ、うけたまわりそうらえ。信心の行者すくなきゆえに、化土におおくすめいられそうろうを、ついにむなしくなるべしとそうろうなるこそ、如来に虚妄をもうしつけまいらせられそうろうなれ。

(真宗聖典六三八頁)

念仏に自力を加えるということ、自然ということは本願力の自然ということが中心。念仏に自力を加えない、又私が念仏に自力を加えている事があさましい事で有る事を自覚させてもらう。植物の上が育てば根もそれだけ育っていると同様、我々もこの世で見たり、聞いたり、見聞すると段々、自力の執着心が根深くなってくる。経験が豊富になれば経験をつかむ、知識が豊富になれば知識をつかむ、才能があれば才能をつかむ、人から認められる事によつて自分という価値をつかむ、そういうものは我々の体質である。だからそれが無くなるという事は無い。それを滅ぼしていくのが『名願力』という名号と本願力、名号となつてはたらく本願力。

その名号になつてはたらく南無阿弥陀仏という言葉になつてはたらく本願力を信ずるといふ事が不徹底であると

光照寺寺報

発行所
真宗大谷派 弘興山
宗教法人光照寺
〒331-0821
さいたま市北区別所町102-2
電話：048-651-2781代
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji
発行人 池田孝郎

する事の出来無い苦しみの中に落ち込んでいくという事。
「この条、いずれの証文にみえそうろうぞや。」そんな事はどこに書いてあるのかと、唯田が言っている。

証文とは、文証であり仏法の上で三つの証。一つは「身証」私は助かりました。と自分の身に証明が有る。次に「文証」とは、『聖典』のどこにこういう事が書いてあると証明すること。次に「理証」とは、仏法の道理に合う事か、合わない事か。そういう三つの証拠がある。そのうち一番大事なのは「身証」。自分がたすからないのにどこに何が書いてあると云つても話にならない。

「信心かけたる行者は、本願をうたがうによりて、辺地に生じて、うたがいのつみをつぐいてのち、報土のさとりをひらくこそ」これが真宗の方便仮土の往生。本願を疑う自分を深く自覚させる為に方便仮土の往生が説かれていた。人を地獄に落とす為に説かれていたのでは無い。

疑いの心を自覚しない人が、疑いの心を深く自覚出来る様にとという意味でこの辺地の往生が、疑城、胎宮という往生で説かれている。

(当寺)法話抜粋要約、文責副住職 釈徹照 次回へ続く

春季彼岸会法要

三月二十一日(土)午後二時三十分 厳修

詳細は三頁

子供会報告

詳細は四頁



無碍光

一凡夫が仏になる法一

住職 池田 孝郎

この度は「故郷」について考えてみたいと思います。何故かと云えば、現代人は故郷を喪失し、自己がどこへ帰えるのかを見失っていると思えるからであります。

「生まれた意義と生きる意味」の根底に「本来、いのちの帰える処」の問いが明らかにしなければ、本当に生きる意味を見失うと思えてなりません。

ハイデッカーの言うように、故郷を失っていく、人間の安住する現在の場所を失って絶えず外の世界に引きずり出される状況下にあります。と。

故郷とは何んでありましようか。故郷を歌った歌は沢山あります。生まれ育った場所、父と母の居る場所、幼い時の追憶等々、懐かしい思い出の情景が浮かびます。故郷を離れると望郷の念が沸き上がって恋しく懐かしい心持はだれしもが持つものと思います。

唱歌の故郷や、啄木の故郷の詩は心に沁みています。又、漢詩の「男子志しを立て郷関を出ず」も若い血潮を鼓舞したものです。又ある時は望郷の念か、悔恨の情か、室生犀星の詩に共感して忸怩たる憶いに呻吟したこともあった。又夜光杯（玉杯）に語られる王翰の「酔うて沙上に臥す 君笑うこと莫かれ 古来征战幾人か 回るの兵士の憶いに自己を投影して、二度と故郷の土を踏むことができないと男泣きに酒に溺れたこともあった。

故郷とは何んでありましようか。ある人は「母の胎内」と。ある人は「母の胸」と、ある人は「海・大地」と表現する。この表現は母性的です。しかし、よく考えてみますと、自分を生み、育んでくれた母性への憧憬でありましよう。その母も又、母より生まれ、父も母も、祖母も祖父も、又、兄弟、姉妹も、否、一切の生きとし生けるもの全てが生まれて来る根源を頂いている。これ

を「母の如し」といわれる由縁でありましよう。「母」とつく語に、「母国」、「母校」と「母」がつく。やはり生み出すのも、育むものは「母」がつくのでしょうか。

今日「アイデンティティー（自己同一性）の喪失」ともいわれます。自己はどこから生まれて来たのか。この根源の問いが見失われていて、外へ、外へ、未来へ、未来へと希望を追い求め、利便性の欲望をかりたてて、つかんでは消え、つかんでは消えて行く、七色に光るシャボン玉を追うかの様です。まことに泡沫の如く儚い夢を追う姿の現実です。まことに無常観の極まりであります。

お釈迦様はこの世を「諸行無常」と覺り示されておられます。あらゆるものが移り変わり、常なるもの、確たるものはこの世にはないと喝破され、「常楽我浄は、浄土」にありと教え示されてあります。本当に心の安らぐ世界は阿弥陀如来の浄土でありました。私達の本当の故郷は浄土でありました。だれ一人、漏れず救うと誓っておつて下さる親様が本当の親様でありました。皆、我一人子、「子地」と呼び帰えして下さいます。依るべき処、生きる処、帰えるべき処は浄土でありました。今、それを感じる。南無阿弥陀仏。

真の依り処

私はこう聞かせて頂きました。罪惡生死の凡夫、そくばく（沢山）業、業は惡業、煩惱惡業の我身、今日造った業ではなく宿業である。ずっと昔に於いて、そくばくの業をもつていた身である。この自分を証明するのは佛である。又、機の深信は正しく人間が人間として自分を証明されるのである。南無阿弥陀佛、ふき出す涙も、それは貴女です。といわれているのです。どんなにつらくともにげ出せない。変わるものもありません。ただただお念佛申し、この身の宿業を通して佛に遇わせていただくのみです。この世に何をしに生まれたのか。究極は生きること死ぬことです。生きることは、亡くなつて逝く人から何を感じるかが問われています。何をすれば良いか、そばにいて深い深いものを感じ摂取したいものです。南無阿弥陀佛 岡田ノリ子

鈴の音

自分の好き嫌いで
つくっている世界を
穢土という

米沢英雄
（「愚夫愚婦の教え」）

お彼岸



最近、お坊さんがテレビに出

演した番組があります。お坊さんに日頃聞けないようなことを質問して、各宗派のお坊さんが返答したりしています。私も同じお坊さんでありながらたまに興味深く観たりしています。

話の内容は省きますが、お坊さんが出演するというところに番組として、否、世間として、「仏

教が求められている」と受けとめたらいいでしょうか。

私たちの生きる娑婆は苦しみ悲しみのまっただ中です。苦悩を超えていきたいと願うところから生まれたのが「彼岸」だと言えます。

日本特有のお彼岸週間は「いのち」の道理を深く尋ねる機会です。

亡き人は生きている私たちに、生老病死の身の事実を教えて下さった諸仏です。苦しみ悲しみの只中で生きる私たちに、苦悩を超える阿弥陀様の浄土を念ずることが願われています。亡き人を偲びつつ一緒に念仏しましょう。

副住職 (釈徹照)

春季 彼岸会法要

- ・3月21日(土) 春分の日
- ・午後1時30分
～3時30分まで
(1時受付)

- ・光照寺本堂にて
- ・勤行・法話

※準備の都合上、出席人数をご連絡下さい。預骨されている方は率先してお参り下さい。

ご参詣をお待ちしております。

彼岸参り

- ・3月18日(水)
～24日(火)の期間
(但し21日は除く)

※ご希望の日にちをお知らせ下さい。時間につきましてはこちらで調整させて頂きます。ご自宅か当寺のいずれかで読経いたします。

子供会報告

子供会「ポニークラブ」
子供報恩講

坊守 池田 邦子

十二月二十五日(木) 小人七名 大人十名の参加を得て、子供報恩講が勤修されました。子供達と大人の方にそれぞれの調



からあげおいしかった。

声を受け持つてもらい勤行をしました。アニメでふれるほとけさまのこころのDVDで三話を見て楽しみました。お斉(シチュイ)、カラ揚げ、ケ

ひとち 歎異抄

羅漢：親鸞聖人は父母に追善供養の

念仏を申したのか。

「親鸞は父母の教養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。」第五章



「その理由は一切の生きとし生けるもの、皆、世々生々の父母兄弟です。順次に仏となって助けるのです。」

川越喜多院の五百羅漢



集合写真

「キ」等々おいしく頂きました。輪になってすわって音楽をかけてプレゼント交換もしました。なごやかな報恩講でした。次回は、四月一日(水)花まつり お釈迦様の誕生佛に甘茶をかけてお参りします。多くの方の御参加をお待ちしております。

光照寺、旅行記

平成二十六年十一月十四日～十六

日、光照寺旅行『九州の同朋を訪ねて』
—厳松会館、明願寺、光教寺、長崎観光
&クルーズ—と題して九州へ旅行しました。幹事長川澄氏、幹事淡海氏、谷口氏。参加者の方々の感想をお寄せいただきました。皆様にこの紙面をお借りして御礼申し上げます。

(編集長 副住職池田孝三郎)

【旅程表】

一日目

羽田空港→福岡空港→(昼食)
→大宰府天満宮→厳松会館宿泊(佐々木師、堤師ご法話)

二日目

厳松会館→明願寺→(昼食)
→光教寺→祇窯の里、大川内山→武雄温泉宿泊

三日目

武雄温泉→国宝大浦天主堂
→グラバー園→長崎港観光クルーズ→(昼食)→出島眺め→長崎平和公園→長崎空港→羽田空港

楽しく充実の九州旅行でした

川澄 英明

福岡・佐賀・長崎を十一月十四日から十六日まで2泊3日の行程で旅をしました。参加は二十一名です。この年、長崎国体が十一月初旬まで開催されたため、この時期に中高生の修学旅行が集まりました。五月に幹事会を召集して計画をはじめましたが、すでに中型バスの確保が難しく、やきもきの日々が続きました。

ご住職と佐々木先生ご夫妻が過去に長らく学ばれた、宗像市の厳松会館



をご紹介くださり、初日はこちらにお世話になることに致しました。厳松会館に着いた時、隣接する幼稚園児の皆さんが歓声を上げながら駆け寄って来て、可愛い手を差し出してハイタッチをしてくれました。これからの楽しい旅が素晴らしいものに成るといふ予感を感じたのは私だけではなかったと思います。

館長の堤先生のご案内で、厳松会館を立ち上げられた細川先生のお墓を全員でお参りさせていただきました。

厳松会館はこの地域の間法道場として、定期的な行事が頻繁に開催されています。河野恭子さんはじめ同朋の皆様に行き届いたお世話を戴きました。



太宰府天満宮にて

第二日目は、明願寺と光教寺をお訪ねしました。真宗という同じ学びに努める同朋のよしみでしようか、どちらも我々を快く迎えてくださり、初対面の私達にも旧知のように楽しく接してくださいました。後日の望年会でご住職が「同朋すなわち友として交流できたのはわたしたちを導いてくださる阿弥陀如来のお陰です。」と述べられたのが印象的でした。

その後、有田・鍋島焼きを見て、武雄温泉でゆつくりと汗を流し、最終日は大浦天主堂・グラバー園・平和公園を観光し、最後に長崎港クルーズで坂の多い長崎の街を海上から眺め、楽しくも充実した旅行が出来たのは、参加の皆さんのお陰と感謝の気持ちでいっぱいです。

お念仏の朋

淡海雅子

「九州の同朋を訪ねる」友と同朋をどう区別するのか。そんな問いがあった。

厳松会館で私たち一行を堤先生や皆様方がお帰りなさいと迎えてくださった。共に法を聞く場に待ち受けてくださった仲間はいいつくせない暖かさを感じた。皆様は私たちの為に食事や床を用意してくださった。そして共に佐々木先生と堤先生のご法話を拝聴した。

迎えられて送られるまでの全てが仏法の中に在った。だから単なる友ではない、お念仏の同朋なのだ。この感覚は今までにないものだった。私もこのように思いに生きられるだろうかと思うとともに私もお念仏の朋と共にいたい



明るく元気な園児に迎えられて

という願いが強まった。

細川先生を師と仰ぎ、その教えを大切にいただきそれを私たちに伝えてくださるご住職様 佐々木先生 堤先生。そのお働きに育てられまた次へとお念仏は伝えられていく。そうした循環の中に取り込まれている自分が嬉しかった。自我の我執の中で苦しむ私に如来と我との関係を感じさせていたのだ。お念仏の世界は分かっていた所に止まらせない広大無辺の魅惑の世界だ。すでに如来の手の内にあるにもかかわらずに自己弁護に右往左往している私にとって細川先生が残された「聞法の為にお金と時間を使いなさい。」の一言が具体的に私のできることだと響いた。

二泊三日の旅はとても貴重な時間だった。印象に残ることは他にも数々あった。明願寺様の兵戈無用の立派な碑。絶対平和なんて不可能と考える私。光教寺様の荘厳な門。歴史の流れの重み。伊東さんの元気なお姿。グラバー邸で語られたであろう国を動かすような商談、甘い会話。オペラ蝶々夫人はマリ・カラスが最高。豪華客船に乗ったらどんなドレスを着ようか。日頃忘れていたようなことまで考える私。もいてワクワクした。

無事に旅行が終わり羽田に着いた時にはお役終了と安堵した。お世話になった皆様、共に旅した皆様、皆が御同朋。お念仏の朋。

ありがとうございました。 合掌。

九州旅行を終えて

谷口正司

まずは、旅行先での「ご同朋の皆さん」の手厚いもてなしにお礼申し上げます。

また、旅行幹事の一人として、無事に旅行を終えることができ、これがなにより嬉しく思います。

旅行の感想はご同行の方々にお任せすることにして、個人的な旅行の思い出（トラブル）を書いてみることにしました。

今回の旅行は、飛行機に搭乗するのが十数年ぶりのこともあって、何か大きなトラブルが起きるのではと、何となく不安な予感を胸にして、旅行に出かけたのでした。

個人的には不安が的中し、帰りの機内でトラブルを起こしてしまいました。

それは、機内サービスのコンソメスープ（8割ほど残っていたが入っていたコップをテーブルの上で倒してしまい、熱々のスープのほぼ全量が自分のズボンの上に！）

これに気付いたCAさんが紙ナプキンなどを持ってきてくれたおかげで、スープの大部分は拭き取ることができたものの、ズボンと座席にしみ込んだスープ、大量にこぼらした状態はいかんともしがたく、「後悔先に立たず」。

CAさんは、ヤケドを心配して保冷剤などを持ってきてくれるし、通路を通るたびに声をかけてくれるなど、優しさが染みいりました。

一番心配だったのは、ヤケドや座席を汚したことなく、お漏らし状態のまま



まで帰宅しなければならなかった。

幸いにも羽田に着いたときには、目立たない程度に乾いていました。しかし、帰りの宇都宮線

の車内で、隣に座った人の動作に違和感がありました。帰宅してから思い返してみると、「コンソメのにおいがするジイさんがいたよ」と家族に報告している映像が浮かぶのでした。

臨席の方々、ならびに、JALさん、ご迷惑をおかけしました。

最期に、無事帰ってこられたこと、および、九州のご同朋に、感謝いたします。そして、ご同行の皆さん、お疲れ様でした！ 釋正定 合掌



細川巖先生のお墓にて



提先生ご法話



佐々木先生ご法話

「遇いがたくして今遇うことを得たり」

住職 池田 孝郎

この題は親鸞聖人の著作であり、まず、教行信証の総序の言葉を頂いたものです。誠にこの度の光照寺旅行は「伝承」と「証」を実感させて頂いた旅でありました。

巖松会館では堤日出雄先生と明願寺の副住職様が期せずして、歎異抄の第二章の「おのおの十余か国のさかいをこえて」の文を引用され、法話され、いたく恥じ入ったことでした。今日の文明の利器であります飛行機で羽田から福岡空港まで一時間あまり、あとは貸切りバスで移動という行程であり、「身命をかえりみず」の歎異抄の言葉に戸惑いを感じたからであります。

しかし、参加された方々は深い浄土真宗のご縁を頂いた方々であり、その背景を憶えば身を動ずる宿縁・宿善の御催しであり、又、「往生極楽のみちを」といきかんがためなり。」に呼応するものと頂いております。

そして、我々一行を心よく迎えて下さった方々も、巖松会館しかり、明願寺様しかり、光教寺様しかり、深き伝統の中に、お一人、お一人の中に教えが生き、生き生きとして輝いて迎えて頂いた。

これこそ、共に「往生極楽」を求め、出遇い得たこの道こそ、真と証明しておつて下さる、お一人、お一人であられた。

「遇いがたくして今遇うことを得たり」を実感させて頂いた旅でありました。人の上にみ教えが生き、脈々と受

け伝えられて来た伝承の歴史を肌で感じさせて頂きましたこと有難く感謝申し上げます。

光照寺の旅行は移動聞法会でもあり、佐々木玄吾先生にもご法話を賜り、題して「九州の同朋を訪ねて」として、「友の役割、二、自己とは何にか、三、老病死を前にして、と展開してお話し下さった。誠によき師、よき友のご縁を喜ぶものです。

川澄英明旅行幹事長はじめ、幹事の方々のご配慮で、太宰府天満宮、大浦天主堂に参り、日本の宗教的歴史背景に触れ、出島、グラバー園を尋ね、江戸時代から幕末を憶い、平和公園では原爆の恐ろしさを身に感じ、長崎港観光クルーズでは、港内は近代から現代を俯瞰するが如く一望し、移り行く時代の歴史的發展に目を驚かせられた。実に多き旅に感謝申し上げます。お礼と感想にかえさせて頂きます。南無阿弥陀仏。



巖松会館にて



提先生の乾杯御発声



「九州の同朋を訪ねて」の旅に憶う

坊守 池田 邦子

去る、平成二十三年十二月細川先生の十七回忌に帰らせて頂いた以来の御同朋の地蔵松会館。到着後まず細川先生の墓前で皆と共に勤行出来ました事は、生前の先生のお姿を拝する事ができうれしく思いました。堤先生、玄吾先生のご講義を頂き又、言い尽くし様もない程に皆々様の手厚いおもてなしにあずかり、大変感謝を申し上げます。浄土を志求する旅の第一歩のスタートが始まりました。明願寺さんの門前には、兵戈無用の大きな石碑が目にとまり、又そこには気配りされていて御住職の思いが伝わって参りました。若住職さんの方言を混じえてのユーモアある御法話と説明を聞かせて頂きました。次の光教寺さんは五年間役僧を努めてくださった伊東良英さん理子さん夫妻、御住職、坊守様皆様とお会い出来ました事懐かしく思いました。両お寺様には、紙面に表わされない程の感謝と又、坊守としての私の自己覚と資質を問われた様な今回の旅行となりました。自信教人信の誠を尽くす教え通りには行けずとも、近づく努力はしなければいけ



なければいけ



久保山副住職様のお話

い気づきを頂きました。玄吾先生夫妻が、全日程御一緒出来なくなつてしまったのは残念ですが、他の日程はスムーズにまわれ、無事に羽田に到着出来た事には皆様の御協力、お世話様になりました事、感謝申し上げます。合掌

ご恩を賜った感動の九州旅行

副住職 池田 孝三郎
准坊守 池田 恵美
唯 奈（一歳）

この度、九州旅行を企画するにあたり、準備や打ち合わせに、川澄幹事長はじめ幹事さんには多大なご苦勞を荷って頂き感謝致しております。旅行を終えてみればあつという間の三日間でした。参加者の皆様にはご不便もお



明願寺にて

かけましたが、とても良い旅行でしたと温かいお声をかけて頂いたのが救いになります。

細川巖先生のお墓と先生が創立された巖松会館にお参りし、佐々木玄吾先生と堤日出雄先生には短時間で恐縮でしたが、ご法話を頂戴できましたことに大変感謝しております。細川先生のご苦勞と仏法を伝えようという生き様をお話から、又、肌で感じさせて頂きました。

佐々木文子先生のご配慮で、会館では河野恭子様はじめ、ご婦人の皆様に食事や宿泊のお世話を賜りまして誠に感謝申し上げます。料理は格別のものでした。

明願寺の副住職様のご法話では、開基のお話もお伺いし、お念仏が今日まで伝わってくるその背景とご苦勞をお



話から感じさせていただきました。坊守様、准坊守様にもご配慮を頂き感謝致しております。

光教寺様では、お世話になった伊東さんのご縁でお参りさせていただきました。建物の重厚さには圧倒されましたが、住職様はじめ、寺族の皆様のお寺を支えている温もりが感じられました。

今回、盛りだくさんの旅行で、書きたいことはたくさんありますが、参加者の皆様の感想に譲りまして、一言で



明願寺にて

云えば、感謝し尽くせないご恩を賜った旅行だったと感じております。初めて一歳の娘も参加させて頂き、多々ご迷惑をおかけしましたが、お念仏に生きている方に出遇って欲しいという願いだけを胸に秘め、貴重な空間を共にしました。有難うございました。合掌

光照寺の九州旅行

大塚 誠 一

今回の光照寺旅行は、九州の同朋をたずねるというので、例年よりもさらに楽しみにしていた。長崎などは新婚旅行以来である。

光照寺の旅行は、光照寺だからこそたずねるところが多く、毎回新たな発見がある。

さて初日、太宰府天満宮では、もち



伊東さんに迎えられて

ろん卒業成就と家内安全を願った。そして、巖松会館。元気な子供たちに迎えられる、佐々木先生、堤先生のありがたいお話と素晴らしいおもてなしに思わず心のなかで手を合わせた。

細川巖先生はすばらしい。

二日目には、晩秋の日差しの中、明願寺、光教寺をたずね、南無阿弥陀仏のありがたさを改めてひしひしと感じた。

移動中のバスでは、大宮アルディージャグズのプレゼントがあり、感激。(とくに観戦チケット)

武雄温泉では、久しぶりの温泉をたつぷりと味わい、身も心もいやされて深い眠りについた。

最終日、ベテランガイドさんの見事な話術に爆笑したり、感心したり。長



清原住職様のお話

崎観光を楽しんだ。

「九州の人たちはあつたかいねえ。大分に縁深い私は、ちよつと嬉しく感じた思いを胸に、帰路についた。

今回も、私なりに随所に新たな発見があった。あつという間の三日間であつた。

「光照寺旅行 九州の同朋を訪ねて」

大塚 陽 子

今回の旅行は、九州の福岡、長崎、佐賀ということで、とても楽しみにしていた。

一日目は、最初に太宰府天満宮へ行き、学問の神といわれた菅原道真公を祀った所で、息子が中学三年なので、高校受験の祈願ができた。次は、宿泊先の巖松会館へ行った。巖松会館は、故細川巖先生が創設された所なので、一度行つてみたいと思つていた。細川



光教寺にて

巖先生のお墓参りもできてよかったです。そこで聞法されている婦人部の方の手厚いおもてなしをいただき、有り難かったです。そして、佐々木玄吾先生と堤日出雄先生のご話話も聞かせていただき、有意義な時間を頂きました。

二日目は、玄吾先生の体調がよくないということで、急遽ご夫妻で東京に帰られて、玄吾先生には体調不良の中、旅行に参加して頂き、有り難うございました。その後は、明願寺に行き、副住職さんにお寺の創建の由来をお話いただいた。この辺は、昔百姓一揆があつたというお話もうかがいました。そして、おみやげに、お寺に植えてあるいちようの木の実のぎんなんを頂いた。次に、光照寺の役僧だった伊東さんが、昨年退職され、奥さんの実家の



光教寺にて

お寺、光教寺に行かれた関係で、こちらにも訪問しました。とても立派なお寺で歴史もあり、来てよかったです。その後、秘窯の里へ寄り、有田焼のお茶碗をおみやげに買いました。そして、二日目の宿泊先である、武雄温泉の旅館へ泊まりました。

三日目は、長崎へ行き、バスガイドさんの案内で、大浦天主堂やグラバール園を見学し、長崎平和公園も行きました。そして、出島も外観だけ見て、長崎港観光クルーズをして、長崎空港から東京へ帰りました。

いろいろな貴重な経験をさせていただき、光照寺には、有り難うございました。

幹事の皆さんにも、お世話になり、有り難うございました。

九州の同朋を訪ねて

佐々木 玄 吾

私は巖松会館で同朋を友と読んで三十分感想を述べた。真の友が欲しい。真の友はどうしたら得られるか。それは師を持つことによつて得られる。師は私を友よと呼んで下さつて、わかり易く教えて下さり、厳しく叱つて下さつた。私は親しみ近づいていき、時間と金を惜しまずに聞かせて頂いた。その教えによつて南無阿弥陀仏にお会いして念仏申す身を賜った。

九州の巖松会館の方々も光照寺の方々と同様の念仏のお方である。

「朋あり、遠方より来る。亦樂しからずや」と迎えて下さつた。この方々を友よと呼んで、共に聞法し、勤行し、念仏できたことはこの上ない喜びであつた。



懐かしい故郷への旅

佐々木 文 子

今回の旅先は九州で、先ず巖松会館を訪ねて細川先生のお墓参りから始まる旅を企画していただいて、有難うございました。あと二日を共にできなかったのは残念でしたが。

私にとって「生涯の師を持つて」が心に残る先生の最初の言葉でした。「念仏申そう」「継続一貫」などの御教えに導かれて今、有難い人生と多くの御同朋を賜っていることを改めて知らされ感謝しています。

巖松会館の皆様には大変お世話になりました。

南無阿弥陀仏。



光照寺旅行

「九州の同朋を訪ねて」の感想

田 中 郁 雄

私は光照寺さんの旅行は以前二回程参加させて頂きましたが、最近はお席しておりまして、今回もやめるつもりでいました。しかし優柔不断な私は護寺会会長の佐々木玄吾先生や池田孝郎住職や池田孝三郎副住職の御勧めにより参加することにしました。もう一つ参加の理由は福岡の巖松会館に行つて細川先生のお墓をお参りすることです。

羽田空港から飛行機で福岡空港に無事到着して貸切バスに乗り込んでいよいよ九州の旅が発しました。昼食をいただいてから最初の目的地である太宰府天満宮に到着しました。まずび



つくりしたのは人の多さです。修学旅行の学生は多かったのですが、もう一つ多かったのは日本人の様な顔をしているのですが、話している言葉が日本語ではないのです。アジアの観光客なのです。本堂にお参りすると合格祈願の札が一杯ありました。浄土真宗のお寺では合格祈願はないのですが、これが人間の心理であることがわかります。

次の目的地は細川先生の巖松会館です。私は細川先生にお会いしてお話を聞かせて頂いたのは四十一才から六、七年だと思っています。その後先生は亡くなられましたが、私は一度も巖松会館にお参りした事ありませんでした。今回、光照寺さんの旅行の縁によって初めて巖松会館と細川先生のお墓にお参りさせてもらいました。長年の想いが実現して、有り難く感銘を受けました。会館では佐々木玄吾先生、堤日出雄先生の法話を有り難く聞かせて頂きました。夕食はお弁当と九州の同朋の方々が作って下さいました湯豆腐



大浦天主堂にて

を御馳走になり、九州の歌を御披露して頂き、たのしい時を過ごすことが出来ました。九州の同朋のみなさまの心のこもった歓迎に感謝いたします。翌日佐々木先生が体調を崩され東京に帰られたことは残念でした。この後も明願寺をお参りさせて頂き、続いて、前光照寺の役僧をしてもらった伊東さんのいる光教寺をお参りさせて頂きました。この二つのお寺は共に立派なお寺で感銘を受けました。

二日目の宿は武雄温泉でした。温泉に入るのは久しぶりでこの温泉はきれいな湯で、肌がつるつるになり旅の疲



れがとれるようでした。最後の日は長崎観光でした。長崎の平和公園に行つて、平和の像を見た時、今から五十年前に私が高校二年の時に修学旅行でこの平和の像を見たことを思い出しました。その時見た像は真っ白だったと思います。青い像になつていました。ガイドさんに聞いたところ長い間に白色が剥がれて地の青色が出てきたという事でした。平和の像を見て五十年前を思い出しました。紙面の都合で全部を書くことはできませんが、今回の旅行はとても感銘を受けた、充実した旅行でした。今回の旅行を企画された池田住職、池田孝三郎副住職、川澄幹事長に御礼申し上げます。

南無阿弥陀仏



グラバー園にて





感想と御礼

田中 淑彦

この度は光照寺の旅行に参加させていただき有難うございました。

巖松会館、明願寺、光教寺、等立派なお寺で心あたたまるお話とおもてなしをいただき本当に良い旅でした。又、最後の日には長崎へ行き、六十数年前、代用教員をして二年程過ごした大村を見てなつかしく、浦島太郎の様な気持ちを味わって来ました。

今後共どうぞ宜しくお願い致します。

九州旅行

平山 正三

今回は九州旅行とことで、長崎を除いては初めての地で楽しみにしていた。まず、太宰府天満宮の大きさと、参拝者（観光客）の多さに驚き、また、韓国語、中国語等を話す人が多く、まるで外国に來たような錯覚さえ覚えた。次に同った巖松会館では、始めに開館前にある保育園の素朴で明るく元気な園児達の歓迎を受け心とむいでした。佐々木先生、堤先生の法話を聞いた後、地元同朋の皆さんと共に歌・踊りありの食事をともにし楽しい一時を過ごした。地元の方には大変お世話になりました。誠に感謝しています。次に同った明願寺では副住職より寺の歴史、百姓一揆との関わりについてのお話があり、この地においても大規模な一揆があったことを初めて知り、今も昔も庶



ご夫妻の歓迎を受け、久しぶりに元気な伊東さん夫妻に会い、旧交を温めた。明願寺、光教寺共永い歴史があり、特に光教寺の本堂の大きさ、両寺の庫裡の立派さには驚いた。

今回の旅行でお世話になった九州の皆さん及び企画された幹事の方々に感謝いたします。

心にひびいたこと

三輪 民子

巖松会館にて、バスが大きくて、入れないので、少し手前で降りて坂道を歩いて会館の前に着いた時、思いがけない可愛い声に迎えられた、「こんにちは、どこから来たの」「きらきらと輝く瞳に何の疑いも躊躇も無く、いったいいつ、こんなに明るく子どもの声を聞いたかしら、これが細川先生の描かれた理想の幼児教育が生きている世界」と感動し、これから始まる聞法と御法話に胸を踊らせた。

堤先生の率直で明るく暖かいお人柄にふれ、佐々木先生が師の故郷に帰られて、いつもより生き生きと若々し

く話されるので、お二人の先生の理路整然と解りやすいお話の原点だったと嬉しく思いました。お二人の先生のお話が、素直になつた私の心にすっと入りました。

会館の皆様の暖かい心のこもったおもてなしが心にひびきました。

ありがとうございます。

明願寺にて、坊守と若住職夫妻に迎えられ、きれいに整えられた素晴らしい庭に感動しました。新婚の若住職達を送り出して下さった時、若い二人を奥で見守る坊守の暖かい心を頂きました。

光教寺にて、元氣な伊東さん御夫妻に会えて嬉しかった、随所に生けであるお花が門徒さんであるお花の先生の作品とすることで、長い歴史のあるお寺の皆様が実つていたと思えました。



長崎平和公園にて

お知らせ

寺務所より

◆法要のご案内

●春季彼岸会法要 三月二十一日
(土)、午後一時二十分より厳修。

◆光照寺護持会

会員の方は護持会費の納入をお願い致します。又、随時新会員受付中。別紙案内をご覧ください。総会は六月二十一日。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会
樸先生が療養中の為、休講中。

●大経の会

三月二日、四月二十九日、五月十日、午前
十時～午後三時まで。講師は佐々木師
と住職の担当月別『正信偈讃仰』五を
学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

三月二十五日、四月六日、五月二十一日、
午後一時～四時まで。講師は住職『真宗
の簡要』(住職著)サブテキスト『無量寿経
に聞く』(松原祐善著)を学んでいます。

●微風学舎

毎月開催。午後七時～九時まで。講師
は副住職『顕浄土』の教学・親鸞にお
ける現生不退の視座・(副住職著)、サ
ブテキスト『今日のことば』(真宗の生
活)を学んでいます。日程は寺にお尋
ね下さい。

◆さいたま親鸞講座

午後一時～四時。会場は大宮川鍋ビル。

四月十一日、六月十三日。

◆真宗に学ぶつどい

四月二十三日。会場は大聖寺。詳細は
当寺までご連絡ください。

◆埼玉組本願奉仕上山

十月二十六日～二十七日、本山へ上山
します。ご希望の方は当寺にご連絡く
ださい。

◆ホームページアドレス変更

<http://koshoji76.jp>
にホームページアドレスが変わり
ます。(三月一日より)

俳句・川柳



吉澤 光昭

お降りの今に降り来る軽やかな
一筋の潮目はるかや目冴ゆる
水仙の咲きし轡や車力道

河野 日出子

ろう梅の枝を手折れば春隣り

江部 良吉

万葉の香

群萌や聖地にこぞの初菫
きくならく良寛さまの手毬唄
七種粥万葉の香を吹きこぼし
平安びとのゆめ揺籃に和紙を漉く
雪を被て祖師像までもゆるぎなし
女正母系家族の靴いろいろ
しずけしや喜びに似て雪積る

山田 恒

老いの足師走の風が絡みつく
御嶽に初日の出ない年が明け

釈 義深

八十路越え白骨のお文身に沁る
茶を啜り子の行く末を語る夜る
ランドセル孫に思いの学資金

短歌(詩)



河野 日出子

お互いに齢重ねて来しものぞ部屋窓
から初日拝まむ

親心知るや知らずや年明けてだいぶ過
ぎてぞ娘等の来宅

佐藤 セツ子

放射霧ぎつしり降りて視界なき畑を
よぎりて医者へと急ぐ

今日もまた老いのひしめく待合室に若
きお医者と呼ぶ声さやか

外套をぬぎて待ち居る病院の椅子の
ブルーに心ほぐるる

かえり来て脱ぎし帽子に紅葉の一葉止
まりて秋のブローチ

吾が庭はしだれ桜の黄葉につづきてま
ゆみ錦木紅し

佐々木 玄吾

病いいえ再び歩く散歩道富士は見え
たり鯉泳ぎたり

酒類は一切駄目だと医師は言うビール
もですかと念を押したり

半年ぶり市役所の坂上り来て公園の
木々に挨拶かわす

赤秀 品枝

仏前に集いし10人いつまでも健やかな
れと願う初春

冬晴れの空を見上げて姉おもう手足

のリハビリ経過やいかが

篠原 潤子

まんまるのころにあこがれ円を描く
ハチャメチャの年がすぎ初げんか(初喧嘩)
一年で夫の白髪の数ふえてころもと
ないわれの分身



山田 邦興 画

梵鐘

久しぶりに低山に登った。上り下
りを繰り返して、これが最後かと思
いきやその向こうに尾根が続く。苦し
い。疲れた。若い頃と比べ年齢の所
為にする。岐路に迷い、老眼の目で
地図をみる。時々風が枝を揺らし
紅葉が舞う。愛でる余裕もないが、
これに限界と言いつながら本当は適
当に加減し都合よく歩いている。弱
音半分で歩き続けるのは厳しさと
美しさをあわせた自然が和らぎを
与えてくれるからだ。お念仏は自然
と同じく自分の姿を見せてくれる。
自分が絶対と思っているが、あてに
している自分ほど流動的なものは
無いと知る。だからまた、山に登り
たくなり、聞法を続けたい。

釈尼雅亮